

学校関係者評価委員会議事録

日時 2021年1月26日

場所 摂津峡認定こども園

参加者

山田奈津美(公開保育 指導助言)、大谷智光(当法人理事長) 清水百合(園長)
岩尾雅子(阿武山たつの子認定こども園) 山田心美、石田早紀(しまもと里山認定こども園)
藤川真梨奈(浦堂認定こども園) 山中彩夏、藤原沙也花、石田眞裕麗(摂津峡認定こども園)
田中雅人(阿武野中学校校長) 高田聖美(南平台小学校校長) 上田恵子(北阿武野地区福祉委員
長) 植田紗季(摂津峡認定こども園保護者代表) 河村顕子(摂津峡認定こども園卒園生代表)

【公開保育「こども哲学教室」の振り返り】

◎年中のとんぼくみからお話の会を体験している子どもたちであるが、対話を大事にしている園のため、主張できる子が多いなか、自分中心、自分が正解という考えを持っている子が多いと感じていた。そんな中で、いろいろなものがあって良い、お互いを認め合う価値観というものを育みたく、講師の山田先生と相談しながらお話の会を進めてきた。そのなかで、特に印象にあるのがトリックアートである。トリックアートは、見る人によって違うものに見える、どちらも正解であるという経験を通して、人それぞれ見え方、感じ方が違うんだ、違っても良いんだということに子どもたちが気づき始めた。あるとき、子どもが他の子を褒める場面があり、子どもから「得意なことは人それぞれやんな」、という言葉が出てきたことに驚いた。あの子は〇〇が得意、そして私は〇〇が得意、と互いを認め合い、かつ自分のことも尊重できる姿は素晴らしいことだと思った。そういった子どもたちの姿の変容はうれしいことであるが、それ以上に自分の想像を超える子どもたちの姿に驚き、保育に対する価値観が変わった。日々の保育の中で対話を大事にしているのと同様に担任間でも対話の時間を多くとるようにした。保育者が子どもの限界を決めるのではなく、子どもと語り合い、子どもを信じ、子どもに任せて物事を決めるようになった。

◎久しぶりに子ども哲学を拝見した。今回は苦手なものはなに？という問いかけに対し、苦手という言葉が子どもたちがどう理解していくのか、その過程を見ているだけで楽しかった。はじめはイヤ、キライ、と言ってざわめいていた場が、ふと静かになる瞬間、子ども哲学ならではの、場が出来上がる瞬間を感じることができた。

◎いろいろな子どもが発言している様子に、普段からきちんと発言の場を与えられているのだと感じた。さきほどのトリックアートの話を聞き、いろいろな考え方があってよいという理屈を教えるのに、トリックアートは目に見える良い素材だと共感した。

◎子ども哲学というものを知らなかったが、今回実体験し、こんなものがあるのかと衝撃を受けた。園長からの、席を立ったり窓の外を見たりする子はいるけれど、部屋を飛び出していく子はいないというお話の中で、子どもたちの居場所が保証されていることがわかった。学校では居場所づくりと絆づくりをテーマにしているが、教師はつい子どもたちの発言をジャッジしてしまいがちである。生徒をまるごと受け止めるという対応は非常に大切なことだと感じており、生徒の多様性を認める、

権威を手放す、どれも教師が苦手なことではあるが、生徒に居場所があると思わせることは重要な取り組みべき課題である。規律を守ること大事だが、子どもをどう見るかの原点を学ばせてもらったような気持ちでいる。また交流をさせてもらえると嬉しい。

◎私も哲学とは何であるのか？という認識で来て、驚いている。

教師は教育課程ありきで行動してしまうが、子ども哲学のような、ろうそくの明かりのもと、ゆったりとした時間の流れや、指導者の心のゆとりが大切だと実感した。

◎こんな教育があるのだな、と衝撃を受けた。子どもたちを見ていると孫のようで、

自分も心のゆとりを持って見守ることができた。家に帰っても孫に優しく接したいと思う。

◎立ち歩いたり、喋ったりが許される場を園で設けて下さるとするのは親にとって非常にありがたい。

家ではつい厳しくしてしまいがちであるが、自分も落ち着いて、子どもとともに自由な時間を設けてみようという気持ちになった。

◎毎日、こころの栄養をもらい、子どもはすくすくと育っている。

過去に保育参加で体験したこともあるが、山田講師の声のトーンや空気感に、自分も癒されていた。良い園であり、良い取り組みであると思う。

◎大切なことはふたつ。ひとつめ。人と対峙すると権威がつきまとうが、子どもを自由にするためには、

自分自身が自由になることが大切。目に見えないよく分からない権威から解放されることが大事。

ふたつめ、ゆとりの時間を持つこと。鐘が鳴り、また鳴るまでの時間、この時間は自由と決める。

日頃も、ひとりで背負うと思わぬこと。周りにいる、いろいろな人の手を借りながら進んでいけばよい。

【学校関係者評価委員会】

清水園長の挨拶 認定こども園が教育機関の位置付けとなり、これまでの福祉の視点を持ちながらも、教育面での取り組みも強化していく。摂津峡の方針は、「育てる場所ではなく、育つ場所。」大人が育てるのではなく、子ども自身が生まれ持った力で育っていくということ。今年はコロナで様々な行事が変更となったが、その空白を埋める教材の提供、動画配信などに力を入れた。コロナだからといって子ども達に経験してほしいことを中止にするのはしのびなく、長年培った経験と工夫で対策をし、規模は縮小するも何とか実施につなげる一年であった。また、地域や園児たちが幸せであるためには、私たち自身が幸せでなければならないという思いから、職員の休暇取得を推奨するだけではなく、職員間の対話を大切にしてきた。そのなかでも、考えてみよう会議、やってみよう会議は、皆が参加できる取り組みであった。そして学校との連携は、永遠の大きな課題であるが、福祉の感覚で子どもをとらえがちな私たちが、これからは教育面でとらえていくことは重要であると考えている。そのために今後も、小中学校の方々より連携を深めて歩んでいく所存である。最後に、地域の方々については、地域あつての摂津峡認定こども園だと認識しているので、今後も園児だけでなく地域のみなさまのことも大切に園を運営していきたい。

参加者からのコメント

◎福祉は高齢者が多いため、コロナには非常に気をつけている。そんな中でも、子育て広場を楽しんでいる親子は多数おり、少しでも期待に応えたいと思っている。

◎コロナの状況下で、清水園長とは何度も連絡を取り合い、感染防止対策をしっかりとご提示いただいた上で、運動場をお貸しするという決断を下した経緯がある。清水園長の熱意にはいつも頭が下がる想いで、心を動かされる。今後も連携していきたいと思っている。

◎コロナで大変ななかでも、いつも最善策をとってくださることに、感謝している。
子どもたちも、行事が変更になって残念という思いはなく、こんなに出来たという気持ちのほう大きい。本当に感謝ばかりである。

◎昔から子育て施設にはお世話になっており、そのおかげで子育てを乗り越えられたと思っている。
コロナが早く収束し、自分のように困っている親子が救われたらと願うばかりである。

◎ゆったりとした時間が流れていた。自分の気持ちを表現することが苦手な子ども回を重ねていくごとに自分を表現していけるようになっていく。子どもの前の先生、子どもの前の親、子どもの前の医師というように自分の権威をふるうのではなく人と人として接することで自分自身が楽になり余裕が持てるようになる。

最後に

新型コロナウイルス感染症拡大が危惧されるなか防止対策を取りながらもたくさんの方々にお集まりいただきました。ありがとうございました。

今回学校関係者評価委員会を開催するにあたり、園の自己評価を実施しました。教育保育の振り返りはもとより、学校関係者評価委員会開催や自己評価実施により教育保育や運営など、園の足りないところや課題を考える機会となりました。またそれを次年度の事業計画に取り入れることができ、少しでも前に進むことができた実感しています。今後もみなさまのご指導ご助言等をいただきながら、地域のみなさまに安心して利用していただけるよう精進してまいります。